

山と博物館

第14巻

第2号

1969年2月25日

大町山岳博物館



博物館と地域性

アメリカやヨーロッパなど博物館の普及している国々では、知らない土地へ行ったら先ず博物館を訪れる、ということが一般の日常生活の中によく滲透していると聞く。このことは、公共の機関をフルに活用するという市民性が十分に培われており、博物館もまた、その要求に応えるべく整備されていることを物語っている。

日本の現状では、すべての博物館が必ずしもそれだけの信頼を得るに足る条件を備えているとは言いがたい。望ましい博物館とは、望ましい博物館とは、当然それだけの信頼を得る機関でなければならぬと思う。

とくに地方博物館は、中央の国立博物館を小型化したような画一的な性格ではなく、規模こそいかに小さくとも、そこにはなくてはならないという必然的な存立意義をもっていないなければならない筈である。

したがって、地方博物館はその地域の自然条件や歴史的成立過程の相違などによって、活動の内容が特徴的に性格づけられるべきである。大町市の山岳博物館、小諸市の火山博物館、岡谷市の蚕糸博物館などは、その特色をより強く示すユニークな博物館といえる。

反面、このような地方博物館は、その性格上所在地住民の利用は必ずしも多くない傾向があり、時として住民のための社会教育機関という面から、その存在意義を問われるような場合がある。しかし、われわれの行動半径が大巾に拡大した今日では、住民の利用し得る博物館は全国にわたっていると見える。もちろん住民利用者の増大を計る努力は必要であり、望ましいが、利用者数を単に算術的に比較して評価の材料とすることは誤りといわなければならない。博物館は、地道な資料収集や調査研究によって、その地方の学術研究文化に寄与するといふもうひとつの大きな使命をも負っているからである。

(上田市立博物館長・塩入 恒)

台湾の高山とその植物にふれて

(その一) ……玉山の記……

中 村 武 久

台湾は高山の国である。玉山(旧新高山)をはじめ雪山(旧次高山)、秀姑巒山、南湖大山、大霸尖山等々三〇〇〇以上の山がなると一〇〇を越えている。

一昨年春、私は機会を得て台湾を旅行したその折、植物の豊庫として知られる阿里山を訪れ、その山の深さに驚いたのはもちろん、一本の老樹にシダなどの着生種が十数種類もついている状態を目の辺りにし、また台湾を横断する東西横貫公路に入り、夏の別天地とされている梨山の立派なホテルに足を留め、そこから、窓越しに眺めた雪山の雄姿に目をうばわれ、台湾の素晴らしい自然と植物の魅力にすっかりとりつかれてしまった。帰朝後

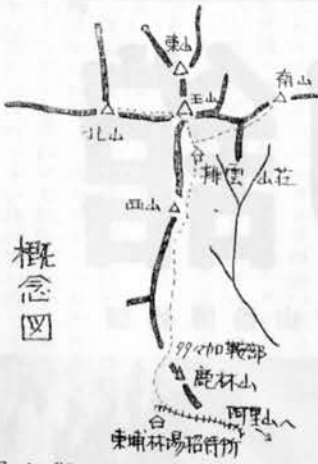
もその印象さめやらず、再度渡台の機会を伺いながら潜かにその計画をめぐらせた。そして大げさではあったが、東京農業大学訪華高山植物研修隊を組織し、大学はもちろん日本山岳会をはじめ日本山岳協会、そして個人的には木村亘氏、丹部節雄氏、小味秀純氏等多くのご支援を得て、ようやく夢かない、昨年六月三十日、我々は玉山と雪山の植物調査に胸はずませて羽田を出発したのである。

【準備】

直夏の太陽の照り輝く台湾、確かに暑いことは暑い、東京の夏よりは湿度が低いのだらう、吹き出すように出た汗も静かに体を休めているといつの間にか消えてしまふ。

到着して最初の仕事はまず入山許可をもらうことだ、予め日本山岳協会から台湾山岳協会へ公式申請して頂いてあったので、台湾山協がいるいろいろお世話下さり、特に同協会役員の内田圃氏、王雲卿氏等の特別なお骨折りを得てわずか三日間の台北滞在で許可証の入手ができた。我々は早速台中市へ移動、台中では我々の隊員の一人、呉鳳玉君のお父さんの御厚意で、家を一軒借用してそこを我々の本拠とした。これが今回の我々の行動を極めて円滑に進められた所以であることはいまでも

概念図



ない。我々はふつうの登山隊と違って植物調査という仕事がある、従って装備なども単に登山の必需品ばかりではない、植物標本用の古新聞紙だけでも三十キロを越える仕末だ、おおかたの装備は日本から持参したが、その古新聞紙や食糧などは全て現地調達、習慣や言葉の違う国での作業は日本での山行きとはかなり違う、幸い呉隊員が通訳をはじめ細々とした身の廻りのことをやってくれたので、そう不

ようやく入山の準備も了え、我々の第一の目的地玉山へ向けて出発したのは七月六日午前二時である。台中駅から嘉義へ行き、そこから登山列車で阿里山へ向う。阿里山は昨年一度来たところなので、途中の状況を私が隊員に説明する案内役をつとめる。標高二四〇〇以上の阿里山まで、約四時間かかって登る列車の車窓からは、熱帯から温帯までの植物景観が、標高が増すにつれて変っていく様子がみごとに展開される。

正午頃阿里山に到着、台湾山協から紹介されている蔡氏を訪問し玉山行きの打合せをする。その後警察及び林務処(営林署)で入山手続きを済ませ、またポーターの手配もして旅舎に落ちつく。

【山荘までの途】



玉山山頂から南山の岩肌を望む

七月七日は日本では七夕である年に一度ならぬ我々にとっては初めての逢瀬を来しもうではないかなどと冗談が出る程余裕のある出発であった。これは今想えば、いかに天候に恵まれた山行きであったかを物語っているといつてよい。しばらくぶりに丁度この日から運行するという森林軌道に乗せてもらい、鹿林山の山腹にある東埔林場まで行く。朝六時に出発し、途中かなりノンビリした軌道車であったが、それでも十時頃に東埔に到着、本来ならばその日のうちに玉山の山荘まで登るのであるが、我々はこの東埔から調査を行なう予定にしてあったので、この日はこの招待所(というふうな宿舎設備)に泊ることにして、早凍荷物を置いて周辺の植物をみに出

自由は感じなかったが、これがヒマラヤなどの深い山への大がかりな調査や探検であったらと思うと、初めて先人の苦勞が解り、その業績の偉大さがしのばれる。

かける、この辺りはかつて針葉樹の森林だったのだそうだが、しかし今では山全体が伐採され、一望草原となり、スキの類や背の低いニイタカヤダゲが広がっている、その草むらの中にはテッポウユリを思わせるタカサゴユリの白い花が点在し、路傍にはニイタカリンドウやコゴメグサ、タカネサギゴケ、ランダイオトギリなどの花がみられる、目にふれる植物はみな日本の亜高山帯に在るものに近い種類だ、しかし谷のような場所では背の高いやぶとなり、その中には森林時代の名残りとどめるかのように変わった種類もいくつかあり、また日本にはみられないイヌワラビの類や、ノキシノブの類など珍しいシダが多い興味は益々深く採集に夢中になって時間も場所も忘れてしまう程だった。

翌朝六時、招待所を出発、途中多々加鞍部までは木材搬出用の道路で路巾も広い、我々は時折り荷物を放り出して道路わきのヤブの中にもぐり込む、そんな状態だからふつうの登山の三倍ぐらいの時間がかかる、ポーター達はこんな経験は初めてと見え、はじめはかたりとまどっていたようだ。鹿林山の尾根に登りきった所でポーターを先発させ、我々は天気の良いのにまかせ途中の調査や採集を

ニイタカリンソウ



北山中腹からの玉山主峯

ゆっくりやっていくことにする。

多々加までは昨日の東埔附近と植物は大差ないが、ここからはかなり変わってくる、路も広い道路から離れ、玉山から西に張り出している大きな尾根(西山)の南側の斜面にとりつく、この斜面はなかなか高山的で、植物も背が低く露岩も多い、ニイタカイバラ、ニイタカシモツケ、ヒメフユイチゴ、ニイタカシラタマなどの低い灌木、イネ科の植物やスゲの類も多い、ハタザオの類、スマイレの類も小さな花をのぞかせている、ハナヤスリやヒメハナワラビなどのシダもかなりある。手を触れると痛いような珍しいハリイノデをみつけたときは本当に我を忘れるほどだった。

植物が次から次へと現われるところどころ岩の斜面に木梯子のかげられたところがあるが、四囲の植物に目をうらばわれ危険も感じない、殊に樹田隊員は一キロぐらい後方に離れている。

こうして今想えば甚だ非常識な登行で、トドマツ林の上限に近い標高三三〇〇に建てられている排雲山荘に到着したのは、もう日も暮れかかる夕刻だった。

翌日は井上隊員の発熱もあって大事をとり前日の標本整理と、近くの森林限界附近の調査で登頂はあきらめた。しかし朝夕青い空にくっきりと浮ぶ玉山山頂の稜線を眺めていると、あの岩壁にはもしや人の目に触れたことのない植物があるのではないかなどと一刻も早く頂上に立ちたいという気持が押えがたい程だった。

台湾エーデルワイス、ウスユキソウ



【玉山々頂へ】

そんな一夜を明けいよいよ今日は山頂へということで五時起床朝食と準備に多少手間どつたが七時出発、ふつうの登山路を登る、この登山路は玉山の正面といおうか、西南斜面につづら折れにつけられていて登り易い、この斜面一帯にはハイマツを思わせるようなニイタカヤダゲと、今が最盛期とばかりに咲き乱れるニイタカシヤクナゲの大群落だ、これらの低い灌木の下には、そして路沿いに、白い絹毛でつまれた美しい葉のフクトメキンバイが黄色い花をつけはじめている。また日本では南アルプスに在って少ないもの一つであるタカネシダは、ここでは雑草といつてよいくらい多い、待望のカワカミウスユキノソウをみせはじめ、少し湿った岩の上に小さなキンポウゲが二種、一つはテガタヒキノカサといつて、白馬岳のクモマキンポウゲに似ているもの、もう一つはニイタカキンポウゲだらうか、近くにタヤマキンバイに似たタイワンタヤマキンバイもある、カワカミスマイレもこのあたりにみられる。

この斜面を登りつめた所を露断崖といい、このあたりから植物の様子が変わる。なにを規準としたのかわからないが少し先きの登山路わきに、温帯林、寒帯林境界の立て看板があり、その近くのヤダゲの中の窪地にニイタカリンソウの姿をみたとき、思わず二〇〇米ほど先きへ行って井上隊員をかけた足で呼び戻した程度。イチャクソウの類、アカバナの類もみられる。やがてニイタカトドマツの森林帯に入る、初めてみる



台湾高山の名花ニータカウスユキソウ

だんだん岩が多くなり、やがて西側のコルに出る。岩に手をかけながら登山路を離れて登ると、目の前に風にゆらいでいるカワカミウスユキソウの白い花は先入感からか、それとも周囲の情景からか、日本のウスユキソウと違って何かヒマラヤのエーデルワイスをしのばせるような気がする。ミヤマコケリンドウの紫が塊になって点在する。そして砂礫地に群生するニータカウスユキソウは、まさにここ台湾高山の名花といっぴよいだろう。

背丈は数センチ、葉は白い綿毛をかむり、花（といっても総苞を含めて、）はカイザイクかそれとも最近はやりのドライフラワーを思わせる乾燥質のやゝ透き徹る弁につつまれ、中心部に黄白の小さい花が顔を出している。日本のタカネウ

スユキソウに近いものだが、とても似ているとはいえない可憐な花だ。そうこうしながらようやく十時半、四千坪にあと三坪という玉山々頂に立ったのである。

山、東に東山、三角にそびえる北山、そして山腹に我々の通ってきた路すじをみせている西山が、あたかも主峯玉山の四天王のようにまわりを囲んでいる。大きな山容の秀姑巒山も目の前にある、山波は遠く雲のかたなに続き、とても島国とは思えない。その雄大な景観にみ入り、頭上から照りつける太陽の痛いような暑さも忘れしばし山頂を動くことができなかつた。

(東京農大講師)

山荘での記念撮影 林務員、中国青年登山協会の方々と



博物館だより

観覧料金の改正

昭和四十四年四月一日より観覧料金が改正される予定でありますのでお知らせいたします。

一般 大人 六十円 小人 三十円
 団体 大人 五十円 小人 二十円
 大人は高校生以上であり、小人は小・中学生で、保育園・幼稚園児は観覧料の対称になりません。又団体は二十名以上となります。

お願い 「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可) (郵便番号三九八)

表紙説明

ハギマシコ (神奈川県丹沢にて)
 撮影 中村一恵

山と博物館 第14巻第2号

一九六九年二月二十五日発行

発行所 長野県大町市TFL大町②〇二一

印刷所 大町山岳博物館

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円

(送料共)